

小学校教師による、小5社会科“森林資源”の教材研究—1枚の写真を通して

里山を未来に伝える

作成：吉田 彰子 (よしだ あきこ／兵庫県佐用郡佐用町立江川小学校 教諭)

寸評：山下 宏文 (やました ひろぶみ／京都教育大学 教授)*



▲3年前に子どもたちも伐採を手伝った里山

「道路端の山の斜面です。後ろのほうの木は高く、手前が低いのがわかりますね。どうしてだと思いませんか。

1960年代までの里山では、雑木林から薪や柴、炭となるクヌギ・コナラなどを定期的に伐っていました。草や落ち葉は、水田や畑の堆肥、あるいは、牛や馬の餌として使われていました。しかし、人々

の生活の変化に伴い、雑木林は放置されることとなりました。

3年前、山の木の葉が落ち、うっすらと雪の積もった1月末、当時5年生の子どもたちも手伝ってこの山の木を伐ったのです。そして20mほど先の炭焼き小屋まで運びました。1mほどの長さに切りそろえ、太いものは薪割りで割っておきます。こうして山の木々は、炭に利用されたのです。

それから1年10ヶ月後、山は切り株から、あるいは、落ちたタネから発芽し、森

へと再生してきました。大きく育ちすぎた木は、伐り出すのも難しく、台風や雪で折れることにもなります。雑木林は、定期的に伐ることによって、多様な樹種や生物が共存する生態系を形づくるのです。私たちに必要なのは、再生する森から収穫された木材を使うことなのです。」

○意図(吉田)：「緑を守ろう」「山を守ろう」「自然を守ろう」などの言葉を目にし耳にすることは多いが、子どもたちにとって、実感の伴わないスローガンでしかないのではないだろうか。かつて雑木林の伐採は、何世代にもわたって利用できるように工夫した方法が取られ、地域の知恵や技術として伝承されてきた。しかし今、雑木林は必要な手入れをされずに放置されている。この学習を通して、私たちの身近な里山の様子を知り、私たちは今後どのようにかかわっていけばよいのかについて考え、里山を守ろうとする実践的態度を育てたい。

○寸評(山下)：前回(11月号)に引き続き「里山」に関する写真教材である。これまでの社会科では、里山への着目があまりなかった。しかし、京都議定書の発効や環境教育推進法の施行といった社会的背景を踏まえると、森林資源の扱いにおいて「里山」をどのように扱うかは重要な課題である。これまでの「国土保全」や「水源かん養」とともに、「温暖化防止」の働きにも注目する必要性が生じてくると思われるが、そうなる「里山」へのまなざしも変化することだろう。本教材は、「里山」の正しいとらえ方を子どもに促すよい教材である。